

まじわり 145 号

2014 年 10 月 5 日 発行

【巻頭言】『憐れみ深い大祭司』

司祭 バルナバ 菅原 裕治

「まじわり」の一四一号から継続して「ヘブライ人への手紙」から学んでいます、今回は、二章一七節～三章一四節から学んでいきたいと思います。

ここでは、「イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです」（二・一七）、また「わたしたちが公に言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。モーセが神の家全体の中で忠実であったように、イエスは、御自身を立てた方に忠実であられました。」（三・一～二）と書かれています。これらは、イエス様が大祭司であり、また使者であること、さらにモーセと比較して、モーセのようにご自身を立てた神に対して忠実な方であったことが述べられています。

これらの文言は、イエス様について、「使者」という言葉を用いて説明したり、あるいはイエス様を「大祭司」であるとたとえたり、さらにはモーセと比較したりするなど、今日の私たちの教会にとって、あまりなじみのない内容と言えます。「ヘブライ人への手紙」を読み学ぶ最初の教会の人々と、今日の私たちとは、聖書に関する状況が異なるからです。今日の私たちは、新約があり旧約があり、それらを聖書として受け入れてイエス様について考えまた信じますが、最初の教会の人々にとって、聖書とは、私たちが旧約と呼ぶ部分だけでした。そこには、当然、福音書に描かれているようなイエス様は登場しませんし、また弟子たちの活動も言葉ありません。しかし、最初の教会の人々は、イエス様を救い主として、ただ何の前提もなく信じようとするのではなく、聖書（旧約）と照らし合わせて、イエス様を救い主として受け入れ、信じようとしていました。これらの文言には、そのような信仰が示されています。その意味では、「ヘブライ人への手紙」から学ぶとは、そのような最初の教会の人々の感覚と共に学ぶことでもあります。

さて、ここではイエス様を「使者」と言っておりますが、それは単なる伝達者ではありません。神から「使者」として遣わされたのですが、贖いによる救いを実現する方です。そしてそのことが次の「大祭司」という言葉に結び付きます。表現は前後していますが、「使者」と同時に、その「贖う」という内容が大祭司の機能を持っているからです。ただし、歴史上存在した大祭司とは異なり、人間に対して憐れみ深く、神に対して忠実な大祭司であったのです。そして次に、イエス様は、モーセと比較されますが、そこではまず「モーセが神の家全体の中で忠実であったように」とモーセについて説明があります。今日の私たちもモーセについて様々な知識や印象を持っていますが、ここでは、モーセが、地上の全ての人になさって人となりが柔和であり、忠実な者であったということが前提となっています。モーセは、偉大な預言者であり、指導者であったと同時に、その人間性も神の前に優れていたのです。それらは、「民数記」

の一 二 章 に述 べられていますが、そこには「モーセという人 はこの地 上 のだれにもまさって謙 遜 であつた」（一 二・三）とあります。モーセの謙 遜 さに注 目 するのは、「十 戒」などの映 画 によ っ て、強 い指 導 者というよ うなイメー ジを持 つこと に慣 れてしま っ ている今 日 的 感 覚とは少 し 異 なるかもし れません。

イエス様 は、そのモーセと全 く同 様 に、旧 約 を背 景として忠 実 な方であつたと述 べられます。しかし、イエス様 は、そのモーセ以 上 に、大 いなる栄 光 を受 けるにふさわしい者とされたと述 べられます。それは、「キリストは御 子として神 の家 を忠 実 に治 められるのです」（三・六）とあ る通 り、イエス様 が、全 てのものを家として造られた神 様、その「神 の家」を治 める方だからで す。モーセは、来 るべきこと の証 しのため に「神 の家」全 体 に忠 実 な方でしたが、イエス様 はそ の「神 の家」を治 めるのに忠 実 な方だとい うこと です。

「ヘブライ人 への手 紙」は、イエス様の業と姿を見 て、旧 約 のど の時 代 の人 物とも違 うこと を認 識 し、更 にその背 後 にある神 様の業・働 きを明 確 にして います。こ こで挙 げられて いるモ ーセは、今 日 の私 たち の教 会 ても聖 書 の登 場 人 物として は有 名 ですが、私 たちの感 覚 以 上 により突 出 した模 範 的 人 間として示 されて いたと思 います。しかし、イエス様 は、キリストと してそれらを超 える存 在 であり、それは単 に人 物としてそうであるのではなく、神 様 が何 を人 間 に示 しておられるのか、また求 めておられるのか、それを明 確 にする存 在 として特 別 であるの です。また、言 葉 としては、従 来 の聖 書 にある「大 祭 司」という言 葉 を用 いたとしても、そこ にある神 の業・働 きは、はるかに確 信 と希 望 に満 ちて いるものだと示 して いるの です。そし てその 新 しい確 信 と希 望 を持 ち続 ける限 り、キリスト者 は、イエス様 が忠 実 に治 めておられる「神 の 家」な のだとい う信 仰 を堅 く持 っ ているの です。

さて、こ こでは何 度 か「忠 実」という言 葉 が出 てきま したが、これは訳 語 を変 えれば「信 仰」 です。日 本 語 では「忠 実」と「信 仰」では、内 容 もニ ュア ンスも異 なって しま いますが、初 代 の 教 会 の人 々にと っ て、それは同 じこと です。神 様 を信 じるとは、神 様 に忠 実 であること です。そ れ故 に、不 信 仰とは、神 様 を単 に信 じないことではなく、神 様 対 して不 忠 実 なことを行 う ことほかなりません。その不 忠 実 な例 がこ こでも示 されて いますが、「だから、聖 霊 がこ う言 われ るとおりです。『今 日、あな たち が神 の声 を聞 くら、荒 れ野 で試 練 を受 けたこ ろ、神 に反 抗 したときのように、心 をかたくなに しては なら ない。』」（三・七 ～ 八）とあ る通 り、それは、詩 編 九 五 編 の八 節 以 下 です。ギリシ ア語 訳 聖 書 から の引 用 ですから、今 日 旧 約 の部 分 とは異 なりますが、祈 祷 書 の朝 の礼 拝 など で良 く用 いら れる詩 編 九 五 編 は、初 代 の教 会 の 人 々から、不 忠 実 への警 告 の文 言 として有 名 であつたの です。人 間 は、神 様 対 して不 忠 実 であるかもし れない。た とえそれがモーセのよ うな偉 大 な人 物 であつても、そうかもし れない。しかし、イエス様 は、神 様 対 して忠 実 であつた。だから、全 ての人 を贖 う憐 れみ深 い大 祭 司 である。神 から遣 わされたイエス様 が忠 実 であるとい うことは、神 様 が人 間 対 して、表 現 としてはおかしいかもし れませんが、忠 実 であることを示 して います。それは言 いかえれば、神 様 は人 間 対 して誠 実 であるとい うこと です。その誠 実 さをイエス様 と通 して私 たちも学 ぶこと、それが神 様 対 する忠 実 さを示 すこと、信 仰 を示 すこと他 なら ない。そし てそれを神 対 して、 また人 対 して行 うのが「神 の家」である。この個 所 はそう示 して いると思 います。

今年 は、国 の内 外 で、そして様 々な人 の営 みにおいて、不 誠 実 な行 いが多 くありまし た。そして数 多 くの 人 命 が失 われ たり、またか つて信 頼 されてい たもの が失 われ たりとい うことが起 こりまし た。しかし、そ のよう な世 の中 にあ っても、神 様 がイエ ス様 を通 してな された業 がある、今 もな お、私 たち一 人 々 々に呼 び掛 けら れてい るそ のよう な業 があるとい うことを見 失 っ てはな らないと思 いま す。この部 分 の最 期 には、「わたしたちは、最 初 の確 信 を最 後 ま でし っ かりと持 ち続 けるなら、キリス トに連 なる者 とな るの です」とありま す。イエ ス様 が信 仰 ・忠 実 さの創 始 者 である、そのこ とをこれか らも信 じて歩 んでい きたいと思 いま す。